

ワシントンに 万延元年遣米使節の

上陸記念碑建立

除幕式行われる

◇万延元年(1860)遣米使節が上陸したワシントン海軍造船所構内に、上陸記念碑を万延元年遣米使節子孫の会で建設寄贈した形で、5月13日に米海軍による除幕式が行われた。

◇この碑が出来たことで ①遣米使節が東海岸までやってきたことを確認するシンボルとなる。 ②遣米使節の歴史をたどる重要なポイントとなる。 ③サンフランシスコから帰国した咸臨丸との違いが鮮明になる。…などの意義があります。

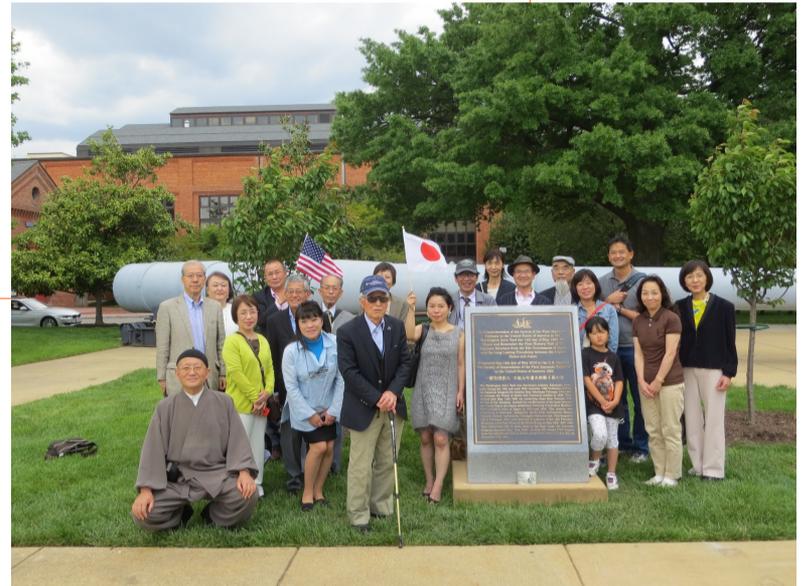
小栗まつり 盛大に行われる

5月22日(日) 東善寺境内 撮影:向島浩介



◇晴れ上がった空のもと、全国から多くの参拝者がおいでになって、小栗まつりが行われた。開会式の後、墓前に献香し来年150回忌を迎える小栗主従と村人の冥福を祈り、幕末の歴史をしのいだ。

◇講演「幕末情報社会と小栗上野介」を語った岩下哲典東洋大学教授はまとめて、小栗ファンが増え機関紙「たつなみ」の読者が広まることを期待すると語って、顕彰会に勇気を与えてくれた。詳しくは9月発行の「たつなみ」41号に掲載予定。



▲造船所構内ウィラードパークに設置された記念碑
▼遣米使節の接待委員であったデュボン大佐の子孫が、遣米使節からお礼に貰った日本刀を持参して披露



◇式典は米海軍の主催で行われた。リンゼー米海軍司令官が「日本にとっても米海軍にとっても歴史的な場所」と挨拶。村垣孝万延元年遣米使節子孫の会会長が「今月末にオバマ大統領が広島を訪問するなど、日米関係が深まっているときに、記念碑の建立は意義深い」と語った。参加者は式典中はカメラ撮影などは止められていたので、式典の様子を伝える画像がないのが、ちょっと残念。

◇当時接待委員として使節一行の世話をしたデュボン大佐の子孫が、使節からお礼に貰ったという白鞘の日本刀を持参して見せてくれた。丁寧に磨かれ、日ごろ保管に気を使っていることがよくわかる。デュボン大佐はホワイトハウスで大統領に国書を渡した三使が一礼して部屋から退出してしまったので、あわてて控室にやってきて「日本式の作法は済んだか?それではもう一度入ってくれ」と再度大統領の面前に案内した人物。ワシントンからボルティモア～フィラデルフィア～ニューヨークまで一行と行動し、ナイアガラ号でマッキーン船長に世話役を託して、使節一行と別れた。

東善寺「たつなみ会」会員募集 年会費1300円 『小栗上野介情報』などを発行のつど発送、年1回発行の小栗上野介顕彰会機関誌「たつなみ」を送ります。申し込みは東善寺へ

□ワシントン・ダレス空港で奇跡の出会い

◇上陸記念碑除幕式のあと16日に帰国するためワシントン・ダレス空港に行き、免税店で働いている日本人女性と話しているうち、住職が群馬県からと聞くと、子どものころに群馬県群馬郡倉渕村権田に行った、という。



▲住職とバザリーふみ子さん（旧姓大井）

驚いて、何という家か尋ねると「父の祖父は磯十郎」だという。なんと！大井磯十郎は権田村字亀沢の農家の出身で小栗家の家臣として江戸で働き、主人上野介とともに西軍によって水沼河原で斬首されている人物!! 磯十郎の子孫でした!!

◇偶然の出会いにお互いにビックリ。父は明治33年6月22日生まれで東京に出て警察に入り刑事をしていたとの話。子供の頃に遊びに行ってももちろん磯十郎はいませんが、「侍だった、と聞いていたので田舎の貧乏さむらいだろうと思っていた、小栗上野介とともに殺されたという話を聞いてなんだか先祖を誇りに思えてきた」と感激していました。これまで磯十郎の子孫は不明とされていましたが、誠に不思議な偶然の出会いでした。

□ワシントン：アメリカ議会図書館に佐藤藤七の絵日記があった！

◇除幕式のあとのレセプションで、「東善寺の村上さんですか？」



と尋ねてきた若い日本人男性は、議会図書館に勤めているという。彼が紹介した若い女性クリスティさんはメリーランド大学院生で、議会図書館にある佐藤藤七の和綴りの絵日記を調べている、というので、ビックリ！そんなものがあったのか！！

クリスティさん▲

◇藤七は権田村の名主で、小栗豊後守忠順の従者九名のひとりとして渡米し世界一周した記録を『渡海日記』としてまとめている。その日記は遣米使節資料集成（七巻）に入っていないので、住職が調査し、『小栗忠順従者の記録』として先年に上毛新聞社から発行した。それも議会図書館に入っているそうで、彼女は絵日記と私の本に載っている挿絵とを比較して調べているというのだ。コピーによると、絵は構成や順序もほとんど同じであった。どちらが原本か？私は次の点で絵日記は藤七以外の人物による複写だろうと判断した。それは、使節一行はハワイに寄って国王カメハメハ四世夫妻に会い、藤七が写生している。椅子に腰掛けた構図も同じで、夫妻の

□『週刊朝日』6月3日号・10日号で

小栗上野介の業績紹介

◇司馬遼太郎の一街道をゆくシリーズ、で三浦半島を訪ねた一冊が『三浦半島記』。



▲6月3日・10日号

この中で目次を見ると横須賀という項目はない。代わりに「小栗の話」というタイトルがある。司馬遼太郎は小栗上野介を語ることで横須賀を語ろうとしているのだ。

『三浦半島記』文中から印象的な記述をひろうと

◇「横須賀はかつて日本近代工学のいっさいの源泉であった」…横須賀から日本の近代工業が広がっていったと言っている、まさに「横須賀が日本の産業革命の地」と見抜いた言葉だ。

◇政治、政治家という言葉はあたらしい。この新鮮な日本語に該当する幕末人の一人は小栗上野介であったに違いない…造船所建設を提議し続ける小栗に某幕臣が「出来上がる頃には幕府はどうなっているかわからない」と反対した時、「幕府の運命に限りがあるとも、日本の運命に限りはない」と語って「いずれ土蔵付き売据えの榮譽が残せるよ」と江戸っ子のシャレを言って笑った。まさに政治家の言葉であり、私心を捨てて公に尽くす人の言葉である。

◇この言葉を知れば、小栗上野介に「徳川絶対主義者」という単純なレッテルをはるのは誤りとわかる。

□日テレ BS 6月16日(木)21:00 ~ 片岡愛之助の『歴史捜査』で小栗上野介

歴史番組として人気の『歴史捜査』で、小栗上野介の生涯と業績を正面から取り上げ、おススメです。見落とした人は日テレに「再放送を希望…」と電話してください。

▼靴のカカトの角をしっかりと描いているのが『渡海日記』だが、絵日記はカカトを中国の布靴のように描いている。西洋人の靴を実際に見た人と、見ていない人の差といえる。



▲藤七『渡海日記』のカメハメハIV世夫妻